宮沢賢治の世界の心理学的考察

免　田　　賢

〔抄　録〕

宮沢賢治は、日本を代表する詩人・童話作家である。なおかつ科学者、宗教家、そして行動実践者の側面をもっている。本論文では、賢治理解の枠組みを提示し、宮沢賢治についてこれまで報告された心理学研究について概観をおこなった。第二に賢治自身による世界理解の方法論がどのようなものであったか、諸アプローチから心理学的に検討をすることを目的にした。その上で､作品の「心象イメージ」について知覚･発達心理学、認知心理学、心理力動的な観点からの分析を試みた。さらに、賢治が生きていた時代に影響を受けた心理学者である William James の影響についても考察をおこなった。賢治の作品にみる「心象イメージ」がプリミティブともいえる相貌的知覚によっていること、Jung をはじめとする精神分析の影響を受けていること、さらに賢治が本邦の心理学の発展と歩みをともにしていることが論じられた。最後に、今後の臨床心理学の発展に関連して、賢治研究の意義について展望を述べた。

キーワード：宮沢賢治，心理学，William James，心象，イメージ

まず、本論では宮沢賢治を心理学的視点から理解するにあたって、賢治を対象にした心理学的研究と、賢治から見える世界理解に向けた心理学的視点という２つの立場より検討を行う。

1. 宮沢賢治を対象とした心理学的研究について

宮沢賢治（1896-1933）は、その経歴から詩人であり、童話作家であり、農学校教師であり、農業技師であり、石灰のセールスマンであり、さらに法華経の信者であった（田中、2003）。きわめて、多面的な側面を持った人物である。賢治研究の先駆的存在である小倉豊文は、賢治の存在について「この詩人・科学者・宗教信者・行動的実践者という四要素は、複雑に交錯し、微妙に共存して『一個の人間宮沢賢治を形成している』」としている（栗原、2007）。

宮沢賢治が有するこの多面性に沿った形で、宮沢賢治に対する研究アプローチも多岐にわたり、あらゆる人文科学からの分析、社会科学からの評論、宗教学的検討、自然科学としての意味づけが数多く報告されている。

賢治を心理学的に検討した研究としては、精神病理的精神医学からの検討、臨床心理の一流

派である心理力動的観点から論じたもの、知覚現象学的な検討の３つに大きく分けることができる。まずここでは各観点からの代表的研究をとりあげ、賢治をどのような枠組で分析したかをみることにする。

精神医学的な検討として、パトグラフィ（pathography：病跡学）の観点より、宮沢賢治の精神状態と作品との関係を精神医学的立場から研究したものがある（福島、1970；1985；1996）。

福島は、幼少期から晩年に至るまでの作品や伝記を通して、宮沢賢治に存在する病理性を「不思議の国の宮沢賢治」というキーワードを元に分析する。その結果、その精神の危機と天才が体験する経験と作品に向けた創造性につながったと考察する。さらに、賢治の青年期の危機を躁うつ病であるという視点から分析が行われている。すなわち、伝記的事実を通して、賢治の経歴をつぶさにたどっていく中に、賢治が思春期を過ぎた頃から有していた様々な異常体験や独自の体験様式がすでに表現されていることを明らかにしているのである。福島は、賢治の病的体験が、創造性をもち文学作品の天才性やその生き方へと発現されたと結論づけている。

第二に、臨床心理的分析については以下のようなものがある。まず、関係嗜癖（addiction）というキーワードを軸に宮沢賢治そのものの生き方や対人関係をみて、精神病理的観点から分析を行ったものがある（矢幡、1996）。

関係嗜癖とは、特定の対象者に対して、依存しその関係性に耽溺する傾向を指す。矢幡は妹トシに向けた愛情を、近親を越えた異性に対するものとして指摘する。また、農学校時代からの親友である保阪嘉内に対する法華経への同行の懇願とその拒絶を巡って、共依存という形で二者関係の分析がされている。

共依存（co-dependence）とは、関係嗜癖の中核概念となるもので、自分と特定の相手が相互にその関係へ過剰に依存し、自己存在を相手に担わせて囚われている状態を指す。矢幡はこの概念をもとに、賢治の死の遠因ともいえる異様なまでの献身、ワーカホリックという観点からも、その根底にある嗜癖性を切り口に検討している。

また、臨床心理士である白石（1989、2004）は、作品「銀河鉄道の夜」、「やまなし」についてストーリー分析し、著作より背景となる著者の生き方に関する心理分析を行っている。

森（2010）は、賢治の生涯にわたる生き方の模索を伝記資料と作品を通して、アイデンティティの形成過程という視点から論じている。当時としては非常に長いモラトリアム期間、アイデンティティの模索、経済面での親への依存、生涯にわたって独身で親の家にとどまっていたことなどから、現在では「フリーター」や「パラサイトシングル」といった見地から、賢治を見ることも可能であり興味深い。森は、現代青年に通底する青年期心性を知る上でも賢治は重要な位置にあるとしその意義を主張している。

第三に、知覚・現象学的視点からの検討として、岩川（2000）の分析がある。岩川は「賢治の心理学」という見地から、賢治の「わたくしといふ現象」について述べている。「賢治の心

理学」の特色は、「現れる『けしき』を『そのとほり』に記録することを通して、こころのあり方をみるものであるとし、そのことを方法論的基盤にするような「〈景色・気色〉の心理学」の特質を持つものとしている。そこで、知覚現象について省察したフランスの哲学者メルロ・ポンティについて言及し、「感覚する主体」と「感覚される世界」が同時に誕生するという独自の感覚論について、両者は共通すると示唆している。すなわち、主体と世界との間にそのつど関係が生成し、関係の所産として知覚世界が立ち現れるという、知覚論からの分析を行っている。

このように心理学的観点からの検討も、依って立つ視点により、分析枠組みは全く異なるものである。さらに得られる賢治像と読み解かれる作品の意義は多様なものとなっている。このことは、宮沢賢治の生き方や著作にあるその魅力について、様々な心理学的観点から分析と理解が可能であり、そこから描出される人間理解につながる独自の知見が、賢治研究から得られるのだと考えられる。

2. 賢治理解の心理学的枠組みについて

前項では、賢治理解のための枠組みについて概括した。ここで、賢治自身の世界の対象把握の特徴について考えてみたい。

心理学においては、対象把握と人間理解をどのような姿勢で行うかは、非常に重要な問題である。それによって、問題の立て方も、分析の手段も、求める答えも異なるからである。様々な立場をもっていた賢治の視点を考察することは、臨床心理学のあり方を考える上でも大変興味深いことであると思われる。

現代の心理学は、一般の心理学辞典の定義に見られるように、科学的経験主義の立場から観察・実験によって探求を推し進めようとする実験心理学に代表される一般心理学と、悩み苦しみ症状をもつ人たちを理解し援助を目的とする応用領域としての、臨床心理学に大別できる。後者の臨床心理学は、さらに２つのアプローチに大別される。一つは、基礎心理学との連続性を重視した科学的な立場、すなわちより実証的な立場からデータを収集し治療方法の再現性と治療効果研究を重視する、エビデンス重視の認知・行動的アプローチである。もう一つは、Freud や Jung の精神分析の流れを受けた独自の精神病理理論に則り、こころは無意識の影響を強く受けるという前提のもと、無意識の役割や象徴機能の分析から人間理解と治療を志向する心理力動的アプローチである。

前者は科学、後者は思想としての志向性を強く有すると考えられる。賢治は、科学者であり、思想家（宗教者）であり、この両方が彼の文学にとって両輪とも言うべき存在であった（沼田、1997）。この問題を単純二分法であるが、賢治にかかる科学と主観・信念の問題に照らし合わせて考えると、大変に興味深い。

3. 賢治が持っていた科学者としての視点

まず、宮沢賢治は、自然科学的態度を基本として学んでいた。

賢治は、中学時代もっとも得意な科目は博物であり、中でも鉱物に対する興味が特に強かったという（山内、1989）。花巻農学校から盛岡高等農林学校（現在の岩手大学農学部）に進学したように自然科学的態度を学問として学び、天体物理学、地質学、土壌学、天文学、農学、化学（肥料学）についての科学的知識を有していた。

賢治が学んだこの盛岡高等農林学校は、東北の農業振興を目的に創設されたものである。岩手県は、熱帯性起源の作物である稲の栽培に不利な環境にあり、冷害や山地に近いやせた土壌により、生産性は低迷していた。

賢治は、この冷害と不作に苦しむ故郷の農業従事者を救いたいと希望に燃えて高等農林に入学し、科学を農業のために生かすことを使命としていたという（上田、関山、大矢、池野、1996）。実際、賢治は入学以来の3年間を首席で通し、主任教授の関豊太郎から大きな期待を掛けられたという。卒業論文「腐植質中ノ無機成分ノ植物ニ対する価値」が受理され、翌4月より研究生（実験指導補助）として残ることになり、フィールドに出て稗貫郡土性地質調査に取り組み、その研究報告書をまとめあげた（佐藤、2008）。その後、関から助教授の推挙があるが、断り家業を継ぐ。そして短い期間に多くの詩と童話を残し、最終的には東北採石工場の技術者として37歳で生涯を終えることになる。

童話「グスコーブドリの伝記」のクーボー博士は、地球科学的見地から冷害研究を行っていた関教授がモデルになっている。作品では、主人公ブドリが犠牲になって火山を爆発させ、その二酸化炭素で地球の温暖化が起こり、冷害が克服されるとなっている。科学を信頼した上での体を呈した自己犠牲を通して、農民を救おうとしたのである。

このような賢治の姿勢は実生活でも体現されているし、方法論における自然科学と実証志向は、「銀河鉄道の夜」の中の一節にも現れている。

「けれどももしおまへがほんたうに勉強して実験でほんたうの考とうその考とを分けてしまえばその実験の方法さへきまればもう信仰も化学と同じやうになる」第75葉（自筆番号なし）丸善特製二原稿用紙裏

上記の一節は、第3稿のものであり、「銀河鉄道の夜」の最終稿（第4稿）には残らなかった記述である。ブルカニロ博士はカムパネルラが銀河鉄道から消えた後で泣いているジョバンニの前にあらわれ、上記のように語りかけるという設定になっている（この稿では合計6カ所、「実験」という言葉が使用されている）。

信仰を主観的な信念、化学を客観性に代表される実証科学と考えると、主観的概念も実験によって検証する必要があるとする､賢治が姿勢としての方法論が示唆されている。ここでいう、「ほんたうの考とうその考」とは、おそらく宗教観に基づくものと考えられるが、それが何かについては本文中には明記されていない。

「もっと明るく生き生きと生活する道を見付けたい。（中略）近代科学の実証と求道者たちの実験とわれらの直感の一致において論じたい（農民芸術概論綱要）」

これは、「農民芸術概論綱要」にある一節である。本綱要は、賢治が羅須地人協会での講義用として執筆した。「序論」から「結論」に至る10章ごとに10行前後の短い命題によって構成されている。この一節においても、賢治の実験に代表される科学の実証手段を通した農民への貢献、また直感並びに芸術的観点との一致、を目的にしているといえる。

すなわち、賢治は自然科学のもつ方法論を自分の実践のための土台として学び、生活の中で実証することの必要性を強く感じていたと考えてよいであろう。

4. 賢治の世界理解ー心象 mental sketch modifiedを通した心理学的検討

1）心象とは何か

わたくしといふ現象は
仮定された有機交流電燈の
ひとつの青い照明です
（あらゆる透明な幽霊の複合体）
風景やみんなといっしょに
せはしくせはしく明滅しながら
いかにもたしかにともりつづける
因果交流電燈の
ひとつの青い照明です

「春と修羅（序詩）」より

森佐一宛の手紙によると、賢治は「春と修羅」を「或る心理学的な仕事」としたといわれている。

『「春と修羅」も、亦それからあと只今まで書き付けてあるのも、これらはみんな到底詩では

ありません。私がこれから、何とかして完成したいと思って居ります、或る心理学的な仕事の仕度に、正当な勉強の許されない間、境遇の許す限り、機会のある毎に、いろいろな条件の下で書き取って置く、ほんの粗硬な心象のスケッチでしかありません。大正 14 年（1925 年）2 月 9 日の森佐一宛の書簡』より（下線部は著者による）

米地と佐野（2004）によると、賢治自身は「心象スケッチ」を詩ではなく、科学的な「スケッチ」であり、彼の心象に映じた心理学的世界像を科学的に記載し、後日の分析のための論料（証拠）としようとするものであった、としている。すなわち、心象スケッチは、通常詩、ないしは文学的なスケッチ（素描）とみられているが、書き手である賢治自身は自然科学的スケッチと認識していたとの見解である。そこから、米地と佐野は賢治の「スケッチ」が描く世界は、現実の世界から彼の心象に投影されたものであり、賢治にとっては、真の世界像を構築するための論料（証拠）であったと考察している。

実際、賢治自身が「春と修羅」をどのようにとらえていたかも、次の書簡から明らかにされている。「春と修羅」出版の翌年、賢治は岩波書店の岩波茂雄に手紙を書く。

『尾山といふ人が詩集と銘をうちました。（略）厳密に事実のとほりに記録したものを（略）つぎはぎしたものと混ぜられたのは、不満でした。わたくしは渇いたやうに勉強したいのです。貪るやうに読みたいのです。（略）わたくしの本とあなたがお出しになる哲学や心理学の立派な著述とを幾冊でもお取り換へ下さいますならわたくしの感謝は申し上げられません』。（下線部は著者による）

上記より、「春と修羅」がそのまま「事実のとほりに」記載されたものであり、さらに哲学や心理学を学び深めたいという賢治の希望がみて取れる。

一方、われわれ一般的な読み手が受ける印象としては、賢治の「春と修羅」の世界は、現実の正確な描写でデータというよりは、文学表現、メタファーやアナロジーまたは何らかのイメージ（心像や表象）に近いものでないだろうか。また、「心理学的な仕事の仕度」とは何を意味するのだろうか。

そこで、以下、賢治の「心象」の内包する意味について、心理学的に検討を行う。

賢治が「心象スケッチ（mental sketch modified）」として用いている「心象」という語は、大辞林によると「心 見たり聞いたりしたことが基になり、意識の中に現れてくる像や姿。イメージ。心像」となる。

大塚（1998）は、賢治が生きていた大正期における「心象」という言葉がどのように用いられていたかを調べた結果、賢治自身が心理学者である J.R.Angell（1869-1949）の著書に触れていた可能性があると指摘している。Angell は賢治があった同時代を生きており、アメリカ心

理学会会長を務めた人物である。William James（1842-1910）の教え子であり、J.B.Watson（1878-1958）の師にあたる。Angell は機能主義的心理学を主張し、客観的な行動観察をするとともに、内観的方法を排除しないその方法論的寛容さをもって、人間の心や意識の働きを明らかにしようとする立場に立っていた。1904 年の著書 Psychology：An introductory study of the structures and functions of human consciousness が日本語に訳され、本邦で出版されたのは、1910 年（明治 43 年）のことである。

「心象といふ語を用いる時は、思想の感覚的内容（視覚や聴覚）を主としていふ場合である」、「心象といふ働きが発達して来れば、始めて未来を知り、過去を顧みるといふ大切な機能を行ふことができる（「機能主義 心理学講義」、明治 43 年）」。

Angell の定義からは、当時より心象という言葉がきわめて広い心的機能としてとらえられていることがわかる。

大塚の主張通り、賢治が Angell の心理学書を読んでいたと仮定すると、また心象が過去、現在、未来と時間軸を超えて、世界の認識機能を果たすものとみなすと、「銀河鉄道の夜」に代表されるように、時空を越えたイメージという点で賢治が表現する世界との親和性が明らかである。

2）心理学で用いられる心像、イメージ、そして心象について

心像は直訳するとイメージとなる。河合隼雄は、心理学でいうイメージとユング派心理臨床家の立場でいうイメージの間に根本的な違いがあると指摘している（河合、1991）。

河合によると、ユング派心理臨床で扱うイメージは「あくまである個人のきわめて主観的な体験としての」ものであり、「私」が表現しない限り、知りようがない」ものとされる。すなわち、イメージは「ある個人の内界に存在」し、「外界の模造としてよりも、内界の存在の意識化されたもの」であるとされる。すなわち、その人自身の独特の感情体験や、意味、が込められたものであるとされる。

さらに河合（1991）は、イメージの性質として、1. 自律性（自我のコントロールを越えている）、2. 具象性（具体的な行為が抽象的な意味を持つ）、3. 集約性（多義性：イメージは一つの意味とは限らず、多くのことを集約している）、4. 直接性（直接、人に対して働きかける）、5. 象徴性（イメージは象徴性をもっている）、6. 創造性（あらゆる創造活動の背後にイメージが存在する）をあげている。

一方で、心理学、特に認知心理学では、イメージを次のように扱う。まず、イメージは、刺激が直接存在しなくとも、心的に作り上げられる像として定義される。より広い意味では、残像、直観像、幻覚なども含むが、直接対象として扱われるのは、記憶イメージや想像イメージ

である（市川、1996）。たとえば、「雪」という言葉を聞いたときに、冷たい感じや寒さと同時に、積もった雪や降っている雪景色がありありと頭の中に浮かんでくる。これが心的イメージ（mental imagery）である。

日常生活ではイメージという言葉がきわめて広い意味に使われており、印象という言葉と同じ意味で使われたりもする。心理学では、私たちがあたかも「心の中の絵」のように描くイメージを、メンタルイメージまたは心的イメージと呼ぶのである。

古典的行動主義の祖ともいえる J.B. ワトソンは、イメージについて単なる幽霊のようなものにすぎないとし、その機能的意味はまったくないとしている（Watson、1913）。すなわち、客観的に確認できない内的な表象やイメージのようなものは、科学的心理学の対象とはならないと主張した。科学性という点でその後イメージ研究はタブーとなったが、1960 年代以降の認知心理学の台頭により、意識として心の中に現れるものや内的表象も再び研究の対象となったのである。

現在、認知心理学において、イメージは独自の機能をもった心の中の絵のようなものとする立場（Pavio を中心とするイメージ派）と、イメージは言語と同じく命題として表すことができるものであり、イメージの独自性や主観性を排除する立場（Pylyshyn を中心とする命題派）との間に論争があった（市川、1996）。現在に至っても、双方がそれぞれの立場を支持する実験データを集積させ、未だに決着にいたっていない状況である。

要約すると、心理臨床、特にユング派の扱うイメージとは、外界の模写というよりも内界のなんらかの表現であり独自性の強いものである。一方で一般心理学で使われるイメージは、環境世界と自己の知覚、記憶、意味、と感情が付与されたものであり、客観対象として論じ、実証されるものである。

3）賢治の知覚世界－アニミズム、アニマティズム、相貌的知覚、共感覚、通様相現象

宮澤賢治のいう心象スケッチとは、心理学的にみてどのようなものなのだろうか。

ここで、賢治の知覚世界の特殊性について、稿をすすめてみたい。

作品表現の特徴として、まず指摘できるのは、アニミズム（animism）であろう。アニミズムとは、生命のないものに生命を認めたり、意識や意志などの心の働きを認めたりする幼児の心理的特徴をさす。子どもに多くみられることから、自他の混同や未分化性のため自分の心のなかの出来事と外界の出来事とが区別できない未熟な心性としてとらえられる。

賢治の童話「月夜の電信柱」では、主人公恭一により人工物である電信柱の長い列が軍隊行進しているのが目撃される。「月夜の電信柱」は、彼自身の水彩画にもみることができ電信柱が生命あるものとして描かれている（図 1）。

また佐藤（1992）は、賢治の花巻農学校の生徒であり、直接接した機会から次のように述べている。次は、賢治が生徒と二人で道を歩いているときのエピソードである。

図１「月夜の電信柱」

「木の霊が話しているやい」

「おれの思想があの木に移っているもな…」

岩手山登山で

「宮沢先生は岩手山に対して非常に敬虔な気持ちをもっておられて『山の霊に逢いに行く』といって私を連れて出かけた」。

アニミズムと類似の概念として、アニマティズム（animatism）がある。アニマティズムとは非人格的な超自然的な力への信仰をさす。賢治の「話しかける木の霊」、「木に思想が移る」、「山の霊に逢う」といった表現は、学生にふと話されたものであり、エピソードは作品として意図的に書かれたものではないゆえ、より賢治のダイレクトな世界観が表れたものといえよう。

このような、自然界の事物に対する賢治の見方は、心理学用語としては相貌的知覚（physiognomic perception）と呼ばれる。相貌的知覚とは、事物のなかに表情や容貌を認め、いきいきと力動的に知覚することをさす。事物を客観的に認知するのではなく、主客未分化な一体性をなして把握される場合にみられる。これは擬人化とは、異なったものである。擬人化表現が使えるためには、人と人以外の事物の両極性を認識する意識があってはじめて可能となる。すなわち、ひとともものとを明確に分けて捉えることができた後に、一方を一方に結びつけることによって、生き生きとした表現となるわけである。

Werner（1940）が相貌的知覚の概念を発表した際には、すでに賢治が亡くなっている（1933没）ことを考慮すると直接的意図的にその概念を作品に取り入れたとすることはできないが、彼自身の体験形式の特異性を知る上で、重要な概念であろう。

同様に、共感覚（synesthesia）も賢治の作品に随所にみられるものである。共感覚とは、ある感覚刺激を本来の感覚以外に別の感覚としても知覚できる能力のことを指す。賢治では、視覚が嗅覚を呼び起こす例が多い。賢治作品においては、「月」が果実の匂いを感じさせたり、「空」に「さびしき匂ひ」を感じるという短歌が早期よりみられている。詩では「真空溶媒」の「新鮮なそらの海鼠の匂」、「小岩井農場」の「ここいらの匂のいいふぶきのなかで」がある。

視覚から嗅覚への共感覚は「明るいにおい」といった表現にあらわされる。「明るい」がたとえる側としての共感覚、「におい」がたとえられる側の原感覚となる。視覚のような高次感覚は、嗅覚のような低次感覚の共感覚となることはないと報告されている（出原、1996）。視覚が共感覚となりうるのは、聴覚だけである（例：「暗い声」、「黄色い声」）。視覚は、明晰な上他の感覚から独立しているため、換喩表現としては成り立たないといわれているのである。こういったところにも、賢治の知覚特異性が現れているのだろう。

次は、生前に出版された唯一の著書である「注文の多い料理店」の序文である。

わたしたちは、氷砂糖をほしいくらゐもたないでも、きれいにすきとほつた風をたべ、桃いろのうつくしい朝の日光をのむことができます。

またわたくしは、はたけや森の中で、ひどいぼろぼろのきものが、いちばんすばらしいびろうどや羅紗や、宝石いりのきものに、かはつてゐるのをたびたび見ました。

（中略）

もうどうしてもこんな気がしてしかたないのです。ほんたうにもう、どうしてもこんなことがあるやうでしかたないといふことを、わたくしはそのとほり書いたまでです。

（下線部は著者による）

「注文の多い料理店」はいくつかの童話を子ども向けにまとめたものである。その魅力は、本来通じ合わないはずの感覚が別の感覚を通して捉えられる新鮮な知覚対象（percepts）として表現され、私たちが子どもだったときに初めてであった新鮮な瞬間を追体験させ、鮮明によみがえらせるのだろう。これも、賢治自身にとっては意図して外界をメタファー表現や擬人化として捉えたのではなく、「どうしてもこんなことがあるようだから、その通り書いた」と述べているのである。賢治は自然対象物を何かに見立てて、取り合わせの妙をレトリックとして描出しているのではない。また、自己の内面を表現したり、自然対象物を用いた内的表象の象徴表現をしているのではなく、自然－自己の一体化と捉える方がよいと考えられる。

つまり、賢治の心象風景とは、すでに眼前に存在しない記憶像を想起して、時間的変容を経たイメージを表現しているのものではない。むしろ外界を捉えると同時に、知覚対象と一体化して直接感じ取るという、体験様式そのものに特徴があるということができよう。その意味で

は、心象スケッチとは心理学の心像（心的イメージ）と性質を異にするものである。それは、アニミズムに代表される原始的知覚、自然対象を捉えるときの主客混交とした知覚、と考える方が妥当であろう。

5. 賢治と精神分析ー作品の象徴表現とエピソードについて

では、彼の心象と精神分析を代表とする心理力動的立場による、イメージ、または象徴表現との関連について以下に述べる。

C.G.Jung は、人類に共通でより深い人格層にある集合的無意識（collective unconsiousness）を主張した。そのきっかけは、精神病者の妄想などの病的体験内容と神話や民話の探索であり、それらの共通点から考え出されたという。その発想のエピソードについて、デヴィッド ピート（1999）は、次のように述べている。

1906 年ごろ、Jung はチューリヒにおける彼の患者のひとり、あるパラノイア統合失調症者が、頭を左右にふりながら目をほそめて太陽をみているのに気づいた。患者がユングに説明したところでは、太陽はペニスをもちそれが風の起源であり、頭を左右にふることによって彼はこのペニスをうごかすことができる、というものであった。Jung は、数年後に古代ローマで栄えた「ミトラ信仰」に関する文献をみつけ、そこには「太陽の顔から垂れ下がり、風をまきおこすものとされる、1 本の管」のことが語られており、「統合失調症の妄想」と「太陽神の神話」に結びつきを感じた、という内容である。

すなわち、ミトラ信仰を知るはずもない一患者の妄想内容と、古代の神話との一致に、Jung は人間の普遍的な無意識というものを「発見」するに至ったとされる。

次は、賢治の作った中学時代の短歌である（歌稿 A68 手入れ後）。

「われ口を曲げ鼻をうごかせば西ぞらの黄金の一つ目はいかり立つなり」

本短歌は、賢治が 15 歳、明治 45 年（1911 年）4 月に書かれたものである。西空の黄金の一つ目とは、おそらく太陽のことを意味しているのだろう。そして自らが口を曲げて鼻を動かせば、太陽が怒りたったように見えると述べているものである。

これは自分の行動によって、天体や自然に何らかの影響が与えることができるという点で Jung の患者の逸話と大変似かよった内容であり、エピソードとしての共通項をもつ。これを集合的無意識の一証左として解釈するかは本稿では論じないが、Jung 理論にみられた大きな「発見」のきっかけと、賢治の短歌表現の共通性については、興味深い一致といえるだろう。

以下は、「注文の多い料理店」（大正 13 年、1924 年刊）用に賢治自身が書いた販売促進用のチラシからの一節である。

これらは決して偽でも仮空でも窃盗でもない。

多少の再度の内省と分折（原文ママ）とはあつても、たしかにこの通りその時心象の中に現はれたものである。故にそれは、どんなに馬鹿げてゐても、難解でも必ず心の深部に於て万人の共通である。卑怯な成人たちに畢竟不可解な丈である。

書き上げられた童話が「必ず心の深部に於て万人に共通」とするところは、まさにJungの集合的無意識を彷彿とさせるものであり、Jungとの共通点がここでもみられる。

一方で、成人達には理解しがたいものだととする後段の一文から、子どもなら誰しも通過するが成人期に失われゆく、幼児心性の知覚特性に基づく視点からの世界、と読むと、無意識の構造の共通性というよりもアニミズムや相貌的知覚として理解できる。

ここで、賢治作品と象徴機能との関連は、彼がJungの思想に触れていたかどうかが、ポイントとなる。日本でJungが一般に広く知られるようになったのは、河合（1967）の「ユング心理学入門」の出版によってであろう。

寮（2003）によると、国会図書館で精神分析・フロイト・ユング関係の本を検索したところ、Jung関係の初出は、目次に「精神分析學の起源と発達、夢、無意識、ユングの説」とある大正12年（1923年）刊ヒングレー著（寮佐吉訳）「精神分析學」が最初であるという。「注文の多い料理店」刊行がヒングレーの1年後であることを考慮すると、多読家であった賢治がヒングレーの書物に触れている可能性は否定できない。

また、森（1974）によると、賢治は精神分析に対しても知識を持っていたエピソードが知られている。

森佐一（荘己池）が「春になって、蛙は冬眠から覚め、蛙のいる穴へ、ステッキをつきさせば、穴から冷たい空気が出る。ほの暖かい桃いろの春の空気に…」というような詩を作ったことを話すと、賢治は「あ、それはいい、よい詩です…」と言った後、「実にいい。それは性欲ですよ。はっきり表われた性欲ですナ」「フロイド学派の精神分析の、好材料になるような詩です…」と言い、突き出たものは男性、へこんだものは女性、などということを詳しく話したという。

このエピソードによれば、賢治自身が少なくとも精神分析の思想に触れ、その影響を何らかの形で受けていることは否定できない事実であろう。

賢治は1926年12月15日に父宛て書簡で、「心理学や科学の廉い本を見ては飛びついて」買う現状を述べている。賢治は科学としての心理学も学んでいた。

表１．本邦における精神分析関連の出版
国会図書館での検索　（寮、2003による）

大正９年	（1920）	「愛の幻」（ウィルヘルム・ジェンセン、フロイド他著　良書普及会）
大正11年	（1922）	「精神分析法」（久保良英著　中央館書店）
大正12年	（1923）	「精神分析學」（ヒングレー著　寮佐吉訳　東京聚英閣）
大正15年	（1926）	「精神分析入門」（フロイト著　安田徳太郎訳　アルス）
昭和２年	（1927）	「聯想実験法」（チェ・ゲー・ユング著　日本精神医学会）

6. 賢治と心理学者William James

賢治が大きな影響を受けた思想家に、William Jamesがある。James（ 1842-1910）はアメリカを代表する心理学者であり、1875年、「生理学と心理学との関係」という題でアメリカで初めての心理学の講義をした（今田、1962）。1890年「心理学原理」、1901年「宗教的経験の諸相」、思想はどのようなものであれ、結果として有用性があるかでその価値がはかられるとした「プラグマティズム」を1907年刊行しており、後の行動主義心理学にも大きな影響を与えた人物である。心理学の教科書では、情動のジェイムズ・ランゲ説が有名であろう。

Jamesは「自然科学としての心理学」は、哲学等の視点から見てまだ批判の余地が大きいとし、心理学を科学とするには時期尚早であり、「科学の期待」と述べた（今田、1962）。そして、「心理学原理」で、James心理学の中心概念である意識の流れ（stream of consciousness）を発表する。意識の流れとは、人間の意識は静的な部分の配列によって成り立つものではなく、動的なイメージや観念が流れるように連なったものであるとする考えである。賢治の「心象スケッチ」の多くは、観察者と外界との相互作用によって、観察者の意識に展開される現象をリアルタイムに実況中継しようとしたものであるが、以下の詩ノートには直接「意識の流れ」の表記が見られる。

一〇一八

〔黒と白との細胞のあらゆる順列をつくり〕

三、廿八、

黒と白との細胞のあらゆる順列をつくり
それをばその細胞がその細胞自身として感じてゐて
それが<u>意識の流れ</u>であり
その細胞がまた多くの電子系順列からできてゐるので
畢竟わたくしとはわたくし自身が
わたくしとして感ずる電子系のある系統を云ふものである
（下線部は筆者による）

これは、細胞を電子系の並びにたとえた意識の表現である。意識、または心が脳の細胞活動の結果として生じるものであり、求心神経系の個々のニューロンのあるものは刺激が加えられたときだけ興奮し（on 型）、他のものは刺激が除かれたときだけ興奮する（off 型）というニューロンのその後の知見を予見しているようで興味深い。さらには「わたくし」は「電子系の系統」であるとする点において、電気信号の 1 または 0 としての情報を処理するコンピュータを人間を情報処理する存在のモデルとしてとらえる情報処理心理学の萌芽をみることができる。これも賢治の天才というべきであろう。

James は、13、4 歳になるころまでに自分の好みや適性を模索しながら、芸術と科学が自己の内部で反発するのを強く感じていたという（スティーブン・C・ロウ、1998）。その後、父親から科学を選んで芸術を捨てるように言われ、医学の学位論文提出後精神的危機に陥った。そしてさまざまな混迷と模索を経てうつ状態から回復し、心理学の道に進み業績をあげた。そうして哲学、教育、宗教研究に関心を持ちアメリカを代表する思想家となったのである。専門の模索と危機、父との相克、これも賢治と非常に大きな共通項である。

James は、1901 年「宗教的経験の諸相」を発表する。これは科学的な方法による宗教心理学の最初の著作であり、幾多の宗教者の原体験の収集を行ってそれをまとめたものとされる。

賢治が James の著作を読んでおり、様々な形で影響を受けていたことは間違いないだろう。

James（1902）は「宗教的経験の諸相」において、特定の宗派を越えた人間の宗教的経験の共通項を探求していけば、一人ひとりが「自己の冒険によって」成熟させる信仰を、「もっと赤みをおびて溌剌とした信仰が植え付けられて、諸君の思い通りに豊かに花を開くことができよう」と述べている。

「赤みをおびて溌剌とした信仰」とは独特の表現である。賢治の作品に「赤い歪形」がある。内田（1988）は、James が与えた賢治への影響について考察をおこない、次の詩が明らかに James をさしたものと述べている。1924 年 6 月の日付で書かれた「林学生」という「心象スケッチ」である。なお「林学生」の先駆形は「赤い歪形」という題であった。

「林学生」
先生、先生、山地の上の重たいもやのうしろから
赤く潰れたをかしなものが昇てくるといふ
（中略）
（それはひとつの信仰だとさ　ジェームスによれば）

ジェームスとは William James を指していると内田はいう。

なお、賢治自筆の水彩画に「日輪と山」がある（図 2）。そこから連想すると「日輪と山」にみる、赤い太陽は信仰であり、宗教体験を描画したものであろう。「日輪と山」は、「林学生」

図２「日輪と山」

とともにJamesの思想を描画表現したようであり、著者には大変興味深く思われる。

Jamesの多元的リアリティ（pluralistic reality）とは、様々な見方はそれぞれ真実であるというものである。一人一人異なる人間が、自らの方法でこれこそ自分にとってリアルな存在だと感じるものがある。それが別の立場の人間からは否定されるものであっても、生き方の基礎となる根本的な視点であるかぎり、その意義と価値を認めていこうというのが、Jamesの基本姿勢である。賢治は、この視点の中で、宗教と科学の一致、原理と実践の調和をめざしたのであろう。

最後に

時代の最先端科学と心理学は共振するといわれる。Wundtの構成主義心理学が、Helmholtzの生理学に影響を受け、Freudの精神分析が熱力学に影響を受け、Watsonの行動主義がPavlovの大脳生理学と条件反射に、現在の認知心理学が情報処理科学と脳科学に共鳴するようにである。賢治作品は、日本における創生期の心理学の発展と同期され、誘発されたようなところがある。すなわち､創生期からの本邦の心理学の発展と歩みをともにしているのである。そして、逆に賢治が将来の心理学の方向性をも示唆する部分もあるのではないか。

本稿では、心理療法における、賢治の先見性については述べることができなかった。たとえば､「セロ弾きのゴーシュ」にみる動物介在療法や音楽療法のアイディア、調息秘術にみるような賢治が工夫した呼吸法、そして瞬間瞬間立ち現れてくる体験に対して、気づきを向け、思考や感情にはとらわれない存在のあり様からとらわれからの解放を目標とする第三の行動療法ACT（Acceptance and Commitment Therapy）への示唆などである。

賢治が示唆した自然や人に対する畏敬と感性、そして方法論の模索と実践の姿勢はわれわれ臨床心理学を学ぶものにとっても、大きな存在としてあり続けるにちがいない。

〔参考文献〕

J.R.Angell（1904）*Psychology：An introductory study of the structures and functions of human consciousness.* 上野洋一訳（1910）エンジェル機能主義心理学講義，同文館
福島章（1970）宮沢賢治 芸術と病理，金剛出版
福島章（1985）宮沢賢治，講談社学術文庫，講談社
福島章（1996）不思議の国の宮沢賢治 天才の見た世界，日本教文社
市川伸一（1996）イメージの機能的性質，市川伸一・伊東裕司（編著），認知心理学を知る〈第 3 版〉，ブレーン出版
出原健一（1996）日英語の共通点と相違点－共感覚の観点から－，教育システム研究開発センター紀要第 1 号
今田恵（1962）心理学史，岩波書店
岩川直樹（2000）〈私〉の思想家 宮沢賢治『春と修羅』の心理学，花伝社
W.James（1902）*The Varieties of Religious Experience: A Study in Human Nature, Being the Clifford Lectures on Natural Religion delivered at Edinburgh in 1901-1902*, London & Bombay: Longmans, Green, and Co.　W. ジェイムズ（著），桝田 啓三郎（翻訳）1969，宗教的経験の諸相 上・下（岩波文庫）.
河合隼雄（1967）ユング心理学入門，培風館
河合隼雄（1991）イメージの心理学，青土社
栗原敦（2007）小倉豊文の宮沢賢治研究，實踐國文學 72，40
森恭子（2010）青年期心理とアイデンティティの形成過程－宮澤賢治の伝記資料と作品を通して－，瀬木学園紀要 No.4
森荘已池（1974）宮沢賢治の肖像，津軽書房 S 佐藤成（1992）証言 宮澤賢治先生イーハトーブ農学校の 1580 日，農山漁村文化協会（農文協）
沼田健哉（1997）宮沢賢治における科学と宗教，総合研究所紀要 22（3）
大塚常樹（1998）宮沢賢治 心象の記号論，朝文社
F. David Peat（1987）*Synchronicity The Bridge Between Matter and Mind* F. デヴィッド ピート（1999）著，管 啓次郎訳（1999）シンクロニシティ，サンマーク出版
S.C.Rowe（1996）*The vision of James.* Element Books Ltd. スティーブン・C・ロウ, 1998（本田理恵訳）ウィリアム・ジェイムズ入門 賢く生きる哲学，日本教文社
寮美千子（2003）祖父の書斎／科学ライター寮佐吉
http://ryomichico.net/sakichi/psychoanalysis.html
佐藤竜一（2008）宮澤賢治 あるサラリーマンの生と死，集英社
白石秀人（1989）銀河鉄道の夜－限りない透明な完成を追う童話の深層，創元社
白石秀人（2004）異次元夢旅行－宮沢賢治のリアルをはしる，春風社
田中末男（2003）宮澤賢治〈心象〉の現象学，洋々社
内田朝男（1988）続・私の宮沢賢治－現代というベンチに賢治と並んで座る，農文協
上田哲，関山房兵，大矢邦宣，池野正樹（1996）図説 宮沢賢治，河出書房新社
Watson, J. B.（1913）Psychology as the Behaviorist Views It, *Psychological Review, 20.*
H.Werner（1940）. *Comparative psychology of mental development.* NY: International Universities Press, Inc.
矢幡洋（1996）【賢治】の心理学 献身という病理，彩流社
山内修編著（1989）年表作家読本 宮沢賢治，河出書房新社
米地文夫，佐野嘉彦（2004）自然科学からみた宮沢賢治の「スケッチ」:「春と修羅」における天空の表現を例に 総合政策 6（1），63-75，2004-09-30

なお、本文引用中の宮沢賢治作品については、以下のものを参考にした。

宮澤賢治（1997）刊「【新】校本宮澤賢治全集」筑摩書房
宮澤賢治（1986）刊「宮沢賢治全集 1-10」ちくま文庫、筑摩書房

（めんた　まさる　臨床心理学科）

2011 年 10 月 31 日受理